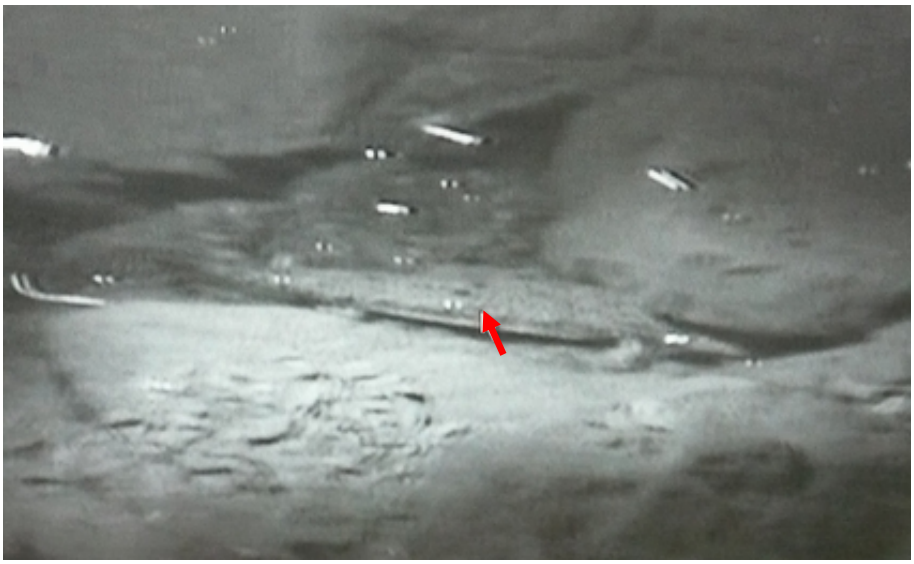
日本
ハンザキ研究所ニュース 2011(2)：通巻No.62

発行２０１１年２月２８日
〒６７９－３３４１兵庫県朝来市生野町黒川２９２
Tel／Fax:０７９－６７９－２９３９
E-mail：info@hanzaki.net
URL：http://www.hanzaki.net
NPO法人　日本ハンザキ研究所　栃本 武良

厳冬期の黒主

さすがの黒主も、アンコ淵の巣穴から姿を見せることが少なくなった。水温が０～３℃では筋肉もこわばってしまうのかも知れない。夜間調査でも捕獲した個体がスローモーションで“ウワッー”と大口を開けて威嚇してくるが怖いどころかユーモラスに見える。ところで黒主は時々だが巣穴から姿を見せるものの、呼吸をするために出てくるとは限らないようだ。では何をしに出てくるのだろうか？　人間の場合には暇つぶしとか散歩とかがあるが、野生の生き物には遊びとか暇をもてあますなんて事があるのだろうか？　昨年に孵化したはずの幼生たちが真っ黒な体で巣穴を出て川の中に散っていく時期なので、保父さんとしてはやることが無くなったのかもしれない。



岩の下に頭を突っ込んだまま３時間も動かぬ黒主

この２月中に黒主の姿を確認できたのは６回だけである。無論、終日見ているわけではないのだが、同じようなペース（６・１２・１８時と食事中はモニター）で観察していて、昨年の８月には15回も確認できていることに比べれば、明らかに動かないようだ。活発に動く時には、巣穴から出てくるとすぐに浅瀬の岩の上で深呼吸を数回繰り返す。そして気の向くままに？周辺をパトロールしたりしている。それが、この冬には穴から出てきてもアンコ淵の凹みからほとんど出てこないで岩の隙間に頭を入れてじっとしている。時に写真のように淵から出ることもあるが、お気に入りの？岩の下に頭を突っ込んで動こうとしない。夏ならばその隙間にはスジエビや小魚がいるのだが、真冬には何もいない場所である。６回の確認が全てそうだったので、こちらも考えさせられてしまう。

写真 1　雪上で歓喜のタロー

写真 2　円山川本流のハンザキ捕獲場所

写真 3　ウィスキービンが破裂して飛び出したマムシ

写真 4　バリバリに割れたエンビパイプ

写真 5　右後肢をしゃぶられた大物ハンザキ

写真 6　カメムシキャッチャー（右が天井用）

川那部 浩哉先生の受賞お祝い会

滋賀県立琵琶湖博物館の初代館長であった川那部先生は、直接教えたことのない人間から“先生”と呼ばれることを断り続けておられます。しかし、私は日本動物園水族館協会の総会などでお会いする時に、自分と同じレベルの“館長”とお呼びすることには抵抗があって“先生”と呼ばせていただいてきました。理由（内緒です）屁理屈？を言って口答えしたのは私だけかもしれませんが、以後何も言われていませんので・・・。2 月 12 日に大津市のプリンスホテルで、フランス共和国レジオン･ドヌール勲章と滋賀県文化賞受賞のお祝いの会が催されました。祝辞を述べられた嘉田由紀子滋賀県知事以下皆さんが“先生”の逸話に触れられていました。

川那部先生には、私が兼任していた島根県立宍道湖自然館に来ていただき、若い飼育係に講演をしていただいたり、山奥のハンザキ研に来ていただいたりしています。先生は宍道湖の淡水化に反対の立場から 40 年以上も関わりを持っておられたとのことで、宍道湖にこられた夜は反対運動をされていた十数名の人たちが集まっての久々の歓談がありました。淡水化を進める島根県の行政に逆らっての運動は、県の職員の中からも反対の声が上っていて、ようやく中止が決定されたのでした。宍道湖自然館の館長人事は、色々問題があって開館の半年前になっても決まらなかったのです。ちょうど私が姫路市を定年になると言うことで白羽の矢が立ったようです。しかし、私は姫路でハンザキのフィールドワークを体力のあるうちにもう少しやりたいという思いで、姫路市の嘱託になることを決めていました。姫路市立水族館には嘱託のポストが無く、水族館の嘱託は無理だと人事当局から言われていました。しかし、最終的に嘱託館長の辞令が出たのは定年の 1 週間前のことでした。そんなわけで宍道湖の館長に誰がなるのか分からぬままに経過して行ったのでした。

平成 13 年 4 月 21 日に開館して、5 月に川那部先生にお会いした時に「二足のわらじを履くことになりました」と挨拶すると、「君がやるのか！」と大変に驚かれたことを覚えています。長年関わってこられた宍道湖への思いが感じられたことでした。

お祝いの会のほうは、勲章と言う言葉も“章”だけにして“川那部浩哉さん”といったふうに、先生の人柄に合わせたタイトルになっていました。参会の人数は 200 名を超えて色々な方が出席されていました。後で、参加者名簿を見てたくさんの方にお会いできなかったことが分かりましたが、これも先生の人望の所以なのでしょう。私も久し振りに水族館仲間とも話が出来て有意義なひと時を過ごせました。しかし、水族館仲間たちもお互いに年を重ね、引退の時を迎えているようでしたが、中にはこれから新しい水族館への挑戦を試みる人もいるようでした。人それぞれ、人生のラストをいかに過ごすのかと言う難問に向かっている所でしょうか。それにしても、嘉田知事がさっと手を出してきて握手されたのには驚きました。琵琶湖博物館の学芸員として長いお付き合いでしたが、こんなことは無論初めての事で、政治家らしくなってきたなと言う感慨を覚えました。学問の世界から、政治の世界への転身は中々大変だと思いますが、頑張ってほしいものです。

円山川水系におけるオオサンショウウオ事情④

会員　加賀見　省一（但馬国府･国分寺館長）

昨年の秋に知人である円山川漁協の組合員にオオサンショウウオの情報提供をお願いしていた所、11 月 8 日に豊岡市日高町土居の円山川本流でカニカゴの中にオオサンショウウオが入っていると言う連絡を受けました。さっそく漁協の事務所に連絡を入れ、現地で集合することにしました。あらかじめ、河川管理者である国土交通省豊岡河川国道事務所にも連絡を入れて、同席していただきました。

カニカゴに入っていたのは全長 835 ㍉、体重 3.25 ㌔の個体で、右後肢第 4 指の先端と尾の背部が一部欠けていました。マイクロチップは未挿入でしたので計測後に入れて放流しました。現場では 840 ㍉と集まられた方々に発表したのですが、事務所に戻って画像を確認した所頭部が少し離れていたので 835 ㍉とこの場を借りて訂正させていただきます。チップの記号は 968000004936877 です。場所は日高町土居の蓼川堰下流約 200 ㍍の左岸よりです。「放流は原則、発見場所に」と言うことで、発見者の好意によって船で運んでいただきました。

円山川本流は川幅が広く水深も深いところが多いため、発見例が少なく日高地域では平成 10 年以来の貴重なデータになりました。豊岡市では職員間をパソコンでつなぐグループウェアがあり、“掲示板”で各事業の案内や情報提供ができるようになっています。オオサンショウウオは“豊岡市の両生類”に指定されていることから、保護した場合には“日時･場所･全長･体重･マイクロチップ記号などと共に発見時の状況”を周知すると共に、情報の提供を呼びかけています。オオサンショウウオをもっと身近に感じてほしいと言う思いや地域への愛着や誇り、自然保護に関心を持ってもらうことに繋がればと願っています。

後日、掲示板の記事を見た職員から次のような質問を受けました。「時々オオサンショウウオが保護されているけれど増えているの？」と言う内容でした。旧･日高町教育委員会時代は平均すると 2 年に 1 度位で連絡を受けましたが，ほとんどが 600 ㍉を超える個体でした。私は「今まで見つかっている個体のほとんどが大きなもので、その大きさに成長するのに何年掛かっているのかわかりませんが、その頃は生息環境も良く、順調に増えていたと思います。しかし、出石川の調査を除き幼生や幼体を見ることがないので（調査を行っているわけではありませんが）産卵が行われ孵化した幼生が順調に成長し増えているのかどうか分かりません」と返事をしました。出石川水系を除き私が承知しているのは 1999 年に、円山川本流脇の水路で 300 ㍉程度の幼体の写真を届けていただいたのと、同年，稲葉川（いなんばがわ）でカニカゴに 300 ㍉程度のオオサンショウウオが入ったと言う情報だけで、共に個体を見てはいません。これからも産卵が各所で行われ、順調に成長していることを願うと共に今年は川遊びをしっかりしなければと思っています。

（栃本：30 ㌢以下の未成体は夜間調査をしていても中々姿を見せません。数の上から言えば無数にいてもいいはずです。川底の石の下や隙間に潜んでいるものと思われます）

続・凍る冬

山国の厳しい冬の話を先月号に書きました。寒い冬の食事には鍋物が恋しくなりますし、料理らしい料理もできないので鍋のオンパレードになります。主役は魚であり肉であり野菜もタップリですので、まあ栄養のバランスもとりやすいかなと思っています。ところが室温が２～３℃になると、カセットボンベのガスも気化しなくなるようで火がつきません。最初はメーカーが違うからかなと思ったのですが、そうではありませんでした。ガス・ストーブの近く（といっても爆発してはいけませんので少し離して）に置いて解決しました。そこへいくと外に置いたままのプロパンガスは優秀ですね。－10℃以下になっても快調に着火します。

写真４のエンビパイプを見てください。バリバリに割れています。ポンプからの水をホースの口径一杯に流していたのですが、凍り付いて破裂したものです。川の 0℃の水が流れていて、気温が－12℃になった夜のことでした。さすがのハンザキたちも 0℃ではあまり動きませんが、それでも繁殖巣穴からは 0 歳幼生たちが川の中に散っていくシーズンです。外敵たちの襲撃から身を守るためであり、流れる落葉と共に落ちつく所へ溜って身を隠しつつ葉についている水生昆虫を食べて育っていくのでしょう。

黒田理事の愛犬タロー君は寒がりだと言われている。車から降りて冷たい雪があるとさっと車に乗り込んでしまう。そんなタローが雪の上を転げまわって歓喜の様子に、黒田さんもどうしたのかしらと驚く。原因は動物の骨を見つけたかららしい。僅かに皮と肉片が付いているだけなのだが、くわえては放り出し、積雪の上であおむけになったりしては骨に咬みついてバリバリと音を立てて砕いている。野性の本能の故だろうか、タローは散歩中にタヌキの子をかみ殺したこともあって、貴重な標本をプレゼントしてくれたこともあった。

この冬は、カメムシの侵入が少なかった。ペッチャンコの体を持ったクサギカメムシはほんの僅かな隙間から部屋に入ってくる。冬越しの場を求めてのことだろうが、飛び回らなければいいのだが明かりに向かってブンブンと飛び回り時に食器の中に落ちてくる。手の届く範囲ならいいのだが天井には届かない。地域の皆さんはペットボトルを常備していて見つけ次第つまんで放り込んでいる。触るのがいやな人はガムテープでくっつけて屑篭に放り込む。私は、棒の先にペットボトルを縛り付けて天井に止まっているカメムシをキャッチしている。工夫の自慢は、ペットボトルの底をカットして、さらに縦に 1 ㌢ほどに切れ目を入れてあることだ。天井の凹凸に対応して、この細長い部分でカメムシをくすぐるのである。カメムシキャッチャーと名付けてほくそ笑んでいる。ピンセットでつまんでいたのもハンディ型のキャッチャーを工夫した。ピンセットで挟むと臭い匂いを出すので閉口していたのだった。しかし、この臭さも病みつきになると癖になって止められないと言う東南アジアのタガメ食の習慣がある。タイの水産の高官が来た時に食べるのかと聞いたら夫人が下を向いて笑っていた。田んぼのカメムシ（タガメ）の難儀だ。

ハンザキ研日誌　　２０１１年２月

１日　・昨日に続いて－12℃
　　・風呂の銅配管凍結破損
　　・ミニ･アクアリウムの外部 90㌢水槽凍結破損
３日　古くて稀少な生き物の仲間入り(古稀)
５日　事務局会議開催、８名
９日　・昨夜の降雨でハンザキ保護センター作業場屋根の雪が滑落し防鳥ネットを大破
　　・円山川水系自然再生推進委員会･技術部会開催
１０日　オオサンショウウオ月例定期健康診断　7 名
１１日　昨年 12 月 14 日以来の下山
１２日　川那部浩哉先生の仏国レジオン・ドヌール勲章と滋賀県文化賞受賞のお祝いの会
１４日　兵庫県文化財保護審議会
１７日　ハンザキの餌用のアマゴとアマゴの餌のペレット入荷
１９日　鳥取県から「ハンザキの血液の利用について」怪しげな方が来所
２０日　黒田理事の愛犬が動物の骨をみつけて雪の上を転げまわって喜ぶ
２１日　与布土川の工事現場よりハンザキ２個体測定、マイクロチップ挿入後放流
２２日　広島大学長澤教授より標本ビン届く
２４日　神戸市立須磨海浜水族園の小林･東口両氏来所
２５日　ハンザキ保護センターの１号ポンプ取替え工事
２７日　・近藤伸一夫妻見学に来所･入会
　　・千葉県野田市から４名見学に来所

……

ハンザキ所長のツブヤ記録

凍る冬と題して、私としては目新しいと感じたことを幾つか紹介してきた。しかし、エンビパイプが１か所だけでなく、縦に正に割ったように破裂していたのは驚きだった。更に、ミニ･ホールに置いていたマムシのホルマリン漬け標本ビン（ウィスキーの空き瓶）が凍結破裂してマムシの頭部に氷の塊が付いたまま転がっていたのには仰天した。上水の滅菌用の次亜塩素酸のタンクも凍結して、滅菌の役目を果たしていなかったのだが、春の気配も感じられる。雪が積もってもすぐに溶けるのは春の近いことを教えてくれる。

湿地ビオトープのカワニナも姿を見せて一斉に餌を食んでいるようだ。アンコ淵のモニターにもカワムツやタカハヤなどの魚影が賑やかになってきた。木々の芽も軟らかくなり、ふっくらとした感じが本当に燃え出る春を演出しているように見える。あっけなく消えてしまう雪、なんとなく淋しい気もするのだが、春近しと言うことなのだろう。

（本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。）